様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６４４

研究課題名（和文）位相理論と叙述構造に関する共時的・通時的研究

研究課題名（英文）A synchronic and diachronic study of phase theory and the structure of predication

研究代表者
横越　梓（Yokogoshi, Azusa）

名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：８０５０８３９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：全ての叙述関係は主語をその指定部、述語をその補部に選択する機能範疇の存在によって確立されるという考えに基づき、叙述関係を伴うと見做される様々な構文の共通性は、Prという具体的な範疇の存在に集約されるというBowers(1993)のPrP分析を用いて、叙述関係を統語的・意味的に検証し、構造を提案した。小節だけでなく、二次述語と呼ばれる構文に対し、ミニマリスト理論に基づいて通時的・共時的な研究を行い、その構造が位相を形成すると主張し統語構造を提案した。さらに歴史的なデータの検証から、小節の構造は元々語彙範疇であったが機能範疇へと歴史的に変化したと提案したというこれまでの研究にさらなる証拠を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
Chomsky (2000)以降、統語構造の派生は位相と呼ばれる範疇を単位として進められるという見解が広く受け入れられており、主語を備えて叙述関係を確立し、命題を構成するPrPが位相を形成すると考えられている。そこに見られる言語現象に妥当な分析を与えることは、言語理論全体の発展に対しても大きく寄与する。本研究は、共時的なデータに加え、叙述関係がどのような歴史的変化を経ながら保持されているのか歴史的コーパスを検証しながら分析を行う。位相理論の見地からは今まで余り注目されてこなかった観点からのデータ採取も行うことになり、それ自体もまた、理論研究にとって貴重な貢献をなすものであると考える。

研究成果の概要（英文）：Under the basic assumption that predication is always established by a functional category that selects a subject and a predicate as its specifier and complement, respectively, I proposed structures for several types of predication relations by examining them from syntactic and semantic perspectives on the basis of Bower's (1993) PrP analysis, which claims that properties shared among various constructions involving predication are reduced to the existence of the specific category Pr. In addition to small clauses, I conducted diachronic and synchronic studies on secondary predication constructions under the current minimalist theory and proposed syntactic structures that embody the conclusion that they constitute phases. Though surveys of historical facts, I also provided additional evidence for the hypothesis that small clauses changed from lexical to functional categories in the history of English, as I had been claiming in my previous studies.

研究分野：統語論

キーワード：叙述　通時的変化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

小節と呼ばれる構文の構造とそれが伴う叙述関係については、小節の主語は述語となる句範疇を補部にとる機能範疇の指定部を占めるとする見解が現在有力となっている。このことは、Stowell(1981)において範疇横断的に見た指定部と言う X'的な構造的位置に帰せられていた主語という文法機能、あるいはそれ述語との叙述関係が、機能範疇の仲介によって達成される、つまり特定の構造形を形成する役割を含めた機能範疇自体の特性に帰せられるものと見做されることを意味している。このような見解を更に推し進めた分析の 1 つが Bowers (1993)に見る PrP 分析である。彼は、全ての叙述関係は主語をその指定部、述語をその補部に選択する機能範疇 Pr(edication)の存在によって確立されると主張し、叙述の確立のみを主たる機能とする専用の範疇を仮定した点で、時制や相等本来的には別個の意味機能を有する機能範疇により、付随的に叙述関係の仲介がなされるとする分析とは一線を画するものと言える。この見解の下では、叙述関係を伴うと見做される様々な構文の共通性は、正に Pr という具体的な範疇の存在に集約されることとなる。

申請者はこれまで小節と呼ばれる構文に対し、Chomsky (2000)以降のミニマリスト理論に基づいて通時的・共時的な研究を行い、その構造が位相を形成すると主張し統語構造を提案している。さらに歴史的なデータの検証から、小節の構造は元々語彙範疇であったが機能範疇へと歴史的に変化したと提案している。これは文法化の観点から見れば非常に重要な提案である。その提案がより広い叙述の概念に利用可能なものかどうか検証すべく、叙述関係を導く他の構文の統語的・意味的特性を観察しながらその統語構造の分析を続けている。

２．研究の目的

本研究の具体的な目的は、以下の通りである。

[A]　最新のミニマリスト・プログラムの理論を生物学的基盤に基づいて研究する。また、情報学的見地より、派生にかかる計算量を導き出し、現行理論における経済性が妥当なものか実証する。

[B]　言語理論で扱うべき経験的基盤として、英語における叙述関係の統語的・意味的振る舞いを観察し、経験的データを充実させる。通時的・共時的データを観察し、申請者が提案している「叙述関係は範疇 Pr の存在に集約される」という主張が拡張可能かどうかの検証に重点を置く。特に Pr は位相を形成するという申請者の仮定がどこまで妥当であるのかを徹底的に調査する。

[C]　最新の生成文法理論の下で叙述関係の性質を捉える。特に小節などの構文で文法化が起こったことを証明し、最新の位相理論の下で説明し、叙述構造の歴史的な発達に理論的な根拠を与える。

３．研究の方法

（１）ミニマリスト・プログラムにおける理論装置の分析とその妥当性の検証

最新の生成文法理論、ミニマリスト・プログラムに関して、その基本的概念、理論装置の仕組みを理解し、言語事実への適用における利点と問題点を、先行研究を検証しながら分析し整理する。また、情報学的見地から、特に派生の経済性について実際の計算量を算出し、最新の理論がはたして妥当なミニマリズムなのか検証を試みる。

（２）現代英語のデータの収集・分類・検証、先行研究の整理、考察

調査対象となる具体的な構文である小節の言語データを収集する。これまで独自に収集してきたデータに加え、新たなデータを収集する。また、小節以外の叙述一般に関する知識や情報も収集し、現代英語の叙述構造は機能範疇であるとの提案を支持する根拠を増やす。また、収集したデータからは得られないものについては、例文を作成し、英語の母語話者による判断を基準に、より精緻なデータベースの作成を試みる。そのために語法や文法に関する実験を行う。現代英語における叙述関係の性質を説明し、その構造を提案する。

これまでの現代英語における小節の構造についての分析と、他の叙述構文の構造についての分析から、叙述関係を表す構文の統語的・意味的特性の共通点・相違点を明らかにする。上記の考察から、現代英語において、叙述構造がどのような機能範疇によって導かれるかを明らかにする。そして、現代英語における叙述の構造が最先端の言語理論の下でどのように捉えられるのかを考察する。

（３）叙述関係を導く範疇の歴史的発達の検証

叙述を表す構文が辿ったと思われる歴史的変化を確かめるための調査を行う。現代英語における小節と他の構文の共通点・相違点を明らかにした上で、調査対象となる言語事実を挙げる。当該構文に関する歴史的発達を理論的に扱った先行研究は多くはないが、改めて調査を試みる。歴史的コーパス、特に参照の対象となるのは中英語期から近代英語期にかけてのデータであるため、複数の歴史的なコーパス（The Oxford English Dictionary (OED), 2nd ed. on CD-ROM、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)、 The Penn-

Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)、The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)、The Corpus of Historical American English (COHA)など）を用いて検証する。そして収集した調査結果をデータベース化する。

検証した歴史的データから、叙述関係を表す構文が現代英語に至るまでどのような特性を持っていたのかを分析する。特にどのような発達があったかを文法化の観点から探り、叙述構造の歴史的変化があったことを証明する。歴史的データの調査結果から、叙述関係を表す構造に対する統語的分析を、小節の構造に対する統語的分析と比較検証する。

（４）叙述の統語構造と位相理論：共時的・通時的な観点から

共時的な観点と通時的な観点からの調査結果をまとめる。ミニマリスト理論の下で、叙述の構造がどのように説明されるのか検証する。そして「叙述は機能範疇 Pr の存在に集約される」という申請者のこれまでの提案に対する、本研究の考察をまとめ、またそれに基づいて、位相理論の概念的妥当性を考察する。

４．研究成果

本研究では主に、叙述関係を表す構文として小節と二次述語の構造を基に検証した。これまでに申請者が提案してきたように、現代英語において、小節や二次述語の統語構造は機能範疇 Pr を主要部とする範疇であると考えられる。この証拠としては、虚辞 it の生起や遊離数量詞の分布などから得られ、叙述関係を導く機能範疇が存在すると言える。さらに、Pr は位相であるとする理論的証拠を提示し、最新のミニマリスト理論に基づいて検証し理論的貢献を提示した。

二次述語の分析に関しては、描写述語において、通常関連する名詞句の一時的な特性を示すものに限られるいうことが指摘されている。この制限に関しては、これまで主に局面レベル述語（stage-level predicate、以降 SLP）と個体レベル述語（individual-level predicate、以降 ILP）の間の違いに基づいた説明がなされてきた。また、主語指向の述語と目的語指向の述語の振舞いの違いを説明するために、いくつかの先行研究では、前者は IP や TP に付加され後者は VP 内の位置に生じると主張されている。本研究では、描写述語は主語指向であれ目的語指向であれ IP や TP よりも統語的に低い位置を占めるとの見解を採った。まず現代英語については、Andrews (1982)が観察しているように、動詞句前置や though 移動、分裂文や VP 削除などの VP 要素が関わる統語操作に関して、主語指向の述語は目的語指向の述語と等しい振舞いを示す。これらのデータは、描写述語が主語・目的語いずれを指向する場合も、IP レベルではなく VP レベルにあることを示唆する。また、描写述語が小節内に現れることができるという観察から、描写述語の統語構造を提案した。

しかし、さらに考察を進めると、主語指向と目的語指向の違いだけでなく、外項と内項の間の対比が重要であることがわかった。以上の検討に基づいて、英語の描写述語に対しての構造を提案した。内項主語の振舞いについて、内項は表層で主語として現れる場合と目的語として現れる場合があり、両者は等しい構造的位置に基底生成されるが、移動の最終着地点が異なると言える。内項目的語が *v*P 指定部、すなわち外項の基底位置を経由して繰り上がるとすると、外項指向描写述語・内項指向描写述語のいずれによっても叙述され得ると考えられる。外項指向の描写述語の場合、Pr の選択特性によりその補部として現れる描写述語は SLP でなければならず、ILP は生起しない。

本研究ではさらに、上記の分析に基づいて当該構文の通時的変遷を捉えることを試みた。これまでの歴史的コーパスの調査の結果、叙述関係を導く機能範疇 Pr は 14 世紀に出現し、その後 18 世紀に至るまでにその位置づけを確立したと考えられる。したがって、当該構文の統語構造は歴史的に変化したことが明らかとなる。つまり、14 世紀に Pr が出現するまでの統語構造は、語彙範疇のみから成る構造であり、Pr が出現して以降は機能範疇の構造を持つようになるが、その位置付けが確立したのは 18 世紀になってからであり、14 世紀から 18 世紀までは統語構造の過渡期として 2 つの構造が存在していたことを明らかにしている。14 世紀に機能範疇 Pr が出現したとすると、M2 期を境に統語構造が変化したことになる。つまり、Pr が無かった 14 世紀以前には、描写述語構文は語彙範疇のみによって形成されていたはずである。そこで、歴史的コーパスを用いて中英語 M1 期から M4 期までの二次述語のデータを検証した。さらに二次述語の持つ意味のタイプと叙述される名詞句が外項か内項かによってデータを整理した。ここで観察した SLP/ILP のタイプによる生起数の違いは、Pr 出現以前に描写述語による叙述が付加構造によって実現されていたと考えると理解できる。述語の持つ意味のタイプによって構造が異なるという観察と、描写述語は主語指向か目的語指向かによって構造的に異なる位置に現れという分析に基づいて、理論的・通時的な考察を加え、当該構文に起こった通時的変化に説明を与えた。

[参考文献（抜粋）] Andrews, Avery (1982) “A Note on the Constituent Structure of Adverbials and Auxiliaries,” *Linguistic Inquiry* 13, 313–317. /Bowers, John (1993) “The Syntax of Predication,” *Linguistic Inquiry* 24, 591-656. /Bowers, John (2002) “Transitivity,” *Linguistic Inquiry* 33, 183-224. /Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA. /Stowell, Timothy A. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 横越梓	４．巻 31
２．論文標題 英語史における描写述語の統語構造について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Promising Age	６．最初と最後の頁 163-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横越梓	４．巻 2
２．論文標題 英語の描写述語の史的変遷と統語構造	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東海英語研究	６．最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 横越　梓	４．巻 1
２．論文標題 描写述語の統語構造に関する一考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東海英語研究	６．最初と最後の頁 59，68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横越梓
２．発表標題 英語における二次叙述の史的変遷
３．学会等名 日本英語学会第37回大会ワークショップ
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 田中智之他編	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 448
3．書名 言語の本質を共時的・通時的に探る―大室剛志教授退職記念論文集―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関